

再会

牧草 泉



一、
玄関にしゃがみこむと、私は下足棚から革靴を取り出した。この革靴は、刑務所収容者が作ったという触れ込みで売っていたものだ。購入したのは数年前、いやもつと昔のことである。時々履いたが、もともと日常生活で靴を履くことは少なかった。ところが長い間物置に入れて置いたために、踵が少しネズミに齧られていた。もつたいない気がして靴店に持って行くと、店主は、

「修理するほどでもないでしょう。このまま履きになったら？ 上質の牛皮が使ってますから。履きやすいはずですよ」

と言った。それで修理を断念して靴箱に放り込んでいたのだった。

確かに合成皮革よりはさわりがやわらかだった。足は無理なく靴の中に滑り込んだ。靴屋の店主のことばが改めて思い出され満足だった。

私はH市役所に勤めていた。市役所では靴はそれほど必要ではない。庁舎内はサンダルで十分だったし、庁舎外勤務ではほとんどスニーカーだった。雨が降れば長靴、測量関係で野外に出るときは登山靴だった。どの課でも、それほど身なりを要求されることはなかった。

自転車に乗って近くの駅まで行き、そこから電車でF市まで行くことにしていた。二月の初旬は一番冷える時期である。

手袋をしてこなかったことが悔やまれた。刺すような冷気が手の甲を襲った。二十分我慢すれば駅につく、そう思つてペダルをこいだ。一週間ほど前に降つた雪の名残が道路脇の草叢に白くくすんで見えた。

彼女は どう変わつて いる の だろ う？ いや彼女ではない別人だ、そう思いながら、彼女以外に脳裏に浮かんでこなかった。彼女であればどんな生き方をしてきたのか？ 彼女の軌跡はある時点で九十度舵を切つていた。その折れ線グラフに尽きることはない興味があつた。お互いに年を経たことによらずしりとした時間の重さを感じた。

小さな路地の居酒屋が脳裏に浮かび上がつてきた。それは周囲の冷気に比例していた。挿絵のようにその光景は貼りついていて。私を温かく包んでくれた懐かしい風景だつた。

二.

Y新聞社から電話があつたのは、昨年十月半ばのことだつた。

「あなたに会いたいという女性がいるが、電話番号を教えてくださいか」ということだつた。編集部の知り合いの女性記者だつた。

「名前はなんといい方ですか？」

「Mと名乗られていますよ」

名前に記憶はなかつた。しばらく間が生じた。記者は続けた。

「以前お会いしたことがあるそうです。実は新聞社としてはこんな仲介はしないことになって いる ん だ け ん が、相手の方が身分を名乗られたから電話を差しあげたんです。新聞を見て名前を知つたと言つておられますよ」

と待ちきれない様子で言つた。

私は新聞社の依頼で「土地の表示に関する解説」を担当していた。週一回の掲載で「土地は生き物」という題の四百字程度の枠だつた。H市は田園都市で農業従事者が多い。県都に近いということで、最近住宅会社の進出が激しくなつて いる。それに比例して土地の紛争も増加した。ほとんど土地所有者が法律を知らないことから来る紛争だつた。私が不動産関係の有資格者であることを聞きつけて、Y新聞社が依頼してきたのだつた。半年掲載の予定が意外と好評で一年に延びて いた。彼女は この小さな記事で私の名前を見つけたのだ。「どういふ方ですか？」

くどいかなと思ひながら私は尋ねた。

「大学の教官をしているということでしたよ」

そう言われても、まったく心当たりがなかつた。日頃女性にはそれほど接触はなかつた。もともと女性にもてるほうでもなかつたし、積極的に女性を口説いた記憶もない。今まで結婚して女遊びをしたといえ、旅先で自らを慰めたことが数回あるだけだつた。

「会うのは構わないのですけどね」

あいまいな返事をした。

「お会いになりたくなければそれでいいんですよ。新聞社としても、そのほうがいいんです」

女性記者はその迷いが理解できるというような口ぶりだった。新聞社も個人的な関係に係わりたくないという雰囲気を感じられた。私はまだ迷っていた。不審な人物ではないことはわかった。しかし大学の教官ではまったく思い当たりがなかった。

「お断りしておきましょうか？」

女性記者が催促するように言った。

「そうですね」

見知らぬ女性であるという不安と、会って見たいという未練が錯綜して返事がいまいになった。

「じゃあ、そのように伝えておきます」

電話は切れた。記者自身が会うべきではないと決めたような電話の切り方だった。

電話が切れると、少し後悔した。「女性だし、身元も知れているのではないか。なぜ会うことに躊躇したんだ？」そんな問いが内から湧いてくるのがわかった。新聞社から電話を受けたあと、いつもその女性のことが頭から離れなかった。頭の中の一部が麻痺したようになっていた。

二ヶ月ほど過ぎて再び女性記者から電話があった。

「実は、一昨日またあの方から電話があって、やはり一度お会いしたいということなんです。一応取り次いで見るとい

うことで電話を切ったんですが・・・」

「そうですね」

私はほっとした気持ちで答えた。

「一度お会いになってみたら？」

記者は会ってみることを勧めた。記者が、相手が女性で問題ないと見たのか、私の心情を読み取ったのか、会うことを勧めた。恐らく電話のやり取りの中で女性記者の気持ちの中に同情心が生じたのだろう。

私は女性記者の勧めに従った。私は電話番号を女性記者に伝えた。住所を言おうとすると彼女はそれを遮った。

「住所はいいですよ。新聞社としては電話番号を伝えるだけです。それ以後はお二人の関係になります。新聞社はタッチしないことになっています」

女性記者は念を押すように言った。

女性から電話があったのはそれから十日ほど後のことだった。四十代半ばの声だった。

「お会いしていただけるということではっきりしています。時間と場所を指定していただければ私が参ります」

上品な声だった。私はまだ女性を思い出せなかった。女性が続けた。

「会ってくださるだけでいいんですよ」

要件は？と口に出す間合いもなかった。

「私をどうしてご存知なんですか？」

「ずっと昔にF市でお会いしてますよ。そうですね、二十数年前かしら」

私はその二十数年前を思い浮かべた。私が高校生の頃である。その頃特定の女性と交際していた記憶もない。また所用で頻繁に会ったという女性もいなかった。

しかしぼんやりとはあったが浮かんでくる女性の顔があった。でもありえないこととしか思われなかった。女性は急かせるように言った。

「場所ではきたらF市にしていたんだけど」
当然会ってくれるものという雰囲気を感じられた。私は慌てて返事した。

「F市ですね。少し時間をください。適当な場所を探してみます」
「お願いします。決まったら電話していただけます？」
彼女の電話番号は隣のK市だった。

「じゃあ、お待ちしています」
電話は切れた。もう少し探ってみたかったが、聞けずじま

いだった。
F市はH市から電車で二十分ほどである。しかし待ち合わせに適当な場所などはまったく知らない。

私は同じ課の若者に適当な場所がないか尋ねた。若者はすぐに教えてくれた。
「Xレストランがいいですよ。駅構内の二階にありますよ。

待ち合わせをしている人がたくさんいますよ」

「レストランかね？」

「そうです。でも和食もありますから。意外と安くて美味しいですよ。予約しておいた方がいいでしょう。いい席をとってくださいますから」

私の洋食嫌いを知つてのアドバイスである。

私はそのレストランに決めると予約の電話を入れた。彼女は時間の指定はしなかった。しかしお互いに勤務を終えてから来られるように、時間は七時にした。K市からは特急を利用すれば一時間ほどで来られるはずだ。翌日彼女に電話した。受付の「こちらはK文化大学です」という声が返ってきた。

「もしもし、Mですが・・・」

女性の声は弾んでいた。私は日時と指定のレストランの名前を告げた。彼女は即座に同意した。

私はまだ彼女のMという名前を思い出せなかった。私の心は見知らぬ女性に会うときめきと不安が錯綜した。いやそうではない、私が記憶にないだけで過去に会ったことがある女性なのだ。やはりあの女性以外にないのではないか？ その女性は「私なのよ、あなた、覚えてるでしょ？」と私に語りかけていた。

三.

「課長、面会人ですよ」

係長から声をかけられてはっと我に返った。慌てて受話器を置いた。

「所有地の境界がわからないからと言って尋ねてきている方なんです」

係長が言った。

「農家の方かね？ それとも山林所有者の方かね？」

「農家の方です」

「それなら、まず地積測量図が必要だ。地積測量図をとって来るように伝えてくれ」

私は係長に指示した。

「じゃ法務局に行くように指示すればいいですね」

係長は自分に言い聞かせるように言った。

「そうだ。地籍測量図をとってみて、それでも疑問が解決しなければ、うちの課に来てもらうように言ってくれ」

「わかりました」

係長は今年都市計画課へ移動してきた。だから土地関係についてはあまり詳しくない。どう応対してよいかわからなかったのだ。

「あ、それから地積測量図がなければ字図を取るよにね」

係長は頷いた。

「法務局での確認が最優先だ。それで境界紛争の内容が明らかになるはずだ」

私は念を押した。

私人間の土地の境界紛争は、都市計画課の仕事の範囲外だった。しかし土地のことで紛争が起きると市民は都市計画課

に相談にきた。地方の都市では市役所と住民との関係が密接である。市役所は住民のためのよろず相談的な面がある。職務外だと一概に断ることはできなかった。

境界紛争は当事者間で解決する問題である。しかし実際は当事者間で解決することはまれである。解決しない場合、当該土地を測量することも必要になるが、この土地測量の費用がばかにならないのだ。土地の面積、土地の所在などにもよるが、土地の価格よりも測量費用のほうがはるかに高くつく場合も出てくる。さらに裁判となると、費用に加えて時間の負担も大きくなる。だから第三者が間に入って話し合いということになる。

話し合いになれば必ずそこには中に立つ者が必要になる。その仲介役を果たすが土地計画課の仕事の一部になっていた。

私は市役所が紛争の仲介に立つことは好ましいこととは思っていない。仲介といっても紛争境界を明らかにし、解決のヒントを示唆するところまでしかタッチしないのだから、やましい点はないのだが、時々不動産関係の会社から批判を受けることがあった。

しかし、土地紛争の当事者特に農業従事者からは市役所が仲介に立つてほしいという要望が強かった。農業従事者は土地の所有権についての法律に疎い。だから農業従事者にとっては、市役所が仲介に入ってもらうのが一番安心なのだ。費用が要らないことも依頼が多い理由だった。

市議会議員も、この土地計画課が中に立つことに反対する者はいなかった。議員を介して依頼してくる者もあった。それだけに仲介に立つ場合は細心の注意を払った。当事者と話し合う場合は必ず二人の職員を立ち会わせた。当事者の勝手な言動を封じるためと、紛争した時の証拠資料確保のためだった。

しかしそうであつても都市計画課が担当することには疑問がないでもなかった。私はこの土地紛争の仲介を市民相談室に移行するように定例課長会議で提案していた。それも一長一短あつて、まだ方向性が決まっていなかった。

四.

F 駅についたのは六時を過ぎていた。退勤時間がまだ続いており、乗降客で混雑していた。会う場所にしたレストランも結構混んでいた。約束の時間は七時である。

テーブルから外を行き交う人々を見ると、人の歩きが昔に比してあわただしかつた。時間の流れが速くなっている。私は時代に取り残されていく自分を感じた。

コップに手をかけたとき、一人の中背の女性が現れた。中背で中ヒールを履いている。薄いベージュのコートを手にしていた。彼女が掛けているサングラスがシャンデリアに反射して光った。時計は七時になるうとしていた。私は緊張した。

「あのー、Bさんでしょうか？」

彼女はグラスをはずしながら尋ねた。

「そうです」

私は思わず立ち上がった。顔に見覚えがあつた。間違ひなかつた。顔が熱つた。心臓がどきどきした。どんな対応をしてよいのか分からなかつた。

「わたしは・・・」

と言つて彼女は自己紹介をした。私は名刺を差し出した。彼女は渡された名刺を見ながら、

「あら、課長さんなんですね」

と言つて微笑んだ。名刺をくれるのかと思つたが彼女は名刺を出さなかつた。

「ご迷惑だつたでしょう。ごめんなさいね。名刺は持つてこなかつたのよ。堅苦しくなるでしょ。そんなのいやだから」
明らかに年下の者に対する言葉だが、その言葉には親しみがかもつていた。

「大学では何を講義されているんですか？」

「朝鮮・韓国文学と英米文学ですよ」

「そうですか」

彼女は間をおかず言葉を継いだ。

「いえ、英米文学の方はピンチヒッターなんです。上司の教授が急に東京の大学へ招かれて移つたものですから」

彼女はにっこり微笑んだ。上品で穏やかな表情に昔の柔らかない面影が見え隠れした。

「朝鮮・韓国文学というと？」

私は空白の時間が襲ってくるのを恐れて慌てて尋ねた。私に朝鮮文学や韓国文学がわかるはずはない。私が大学で専攻したのは生化学だった。しかし今ハングル講座に通っていた。だから少し興味があつた。

「在日朝鮮・韓国文学の位置付けと言つたらいいかしら。あるいは日韓併合時代の朝鮮文学かしら。李洗珠を研究してるの」

「難しそうですね」

「韓国・朝鮮人はよく〈恨〉つていうでしょ。これも韓国文学で大きな比重を占めているのよ。でも難しいわね。学生に教えているんだけど、私も完全に理解しているとはいえないわ」

彼女は次第にため口になっていった。私はそのことに抵抗はなかつた。かえつてほつとした気持ちになつていた。

〈恨〉はよく聞く言葉だった。ハングル講座でも講師の口から日帝という言葉とともに時々出てきた。恐らく彼女がいくら朝鮮・韓国文学を研究して学生に解説しても、朝鮮・韓国人から見ればわずかな理解でしかないのだろうと思つた。このことは私が学んでいる韓国語講座の講師の言からも窺い知れた。

私は彼女と話すうちに、彼女の表情に教授としての知性と厳しさが薄れて暖かさややさしさが現れているのが分かつた。しだいに私は二十数年前に時間が反転していった。三角路地の小さな居酒屋の情景が目に見えかた。居酒屋の女と彼

女がオーバードラップした。寸分の違いもなかつた。時間が急回転した。彼女は小さな居酒屋の前に立つ女にタイムスリップしていった。

五.

私は当時高校二年生だった。定時制高校に通つていた。もちろん昼は仕事をしてた。洋服卸問屋に勤めていた。勤めていたというより、その住み込み社員だった。昔風にいえば丁稚奉公である。店には住み込み社員が四名いた。店と同じ敷地にある別棟が寮になつてた。三人の先輩社員がいて私がつまり新入社員だった。

朝五時に起きる。それから一時間は廊下掃除、それが終ると荷物の発送準備、七時が朝食だった。卸問屋だから荷物の出入りが激しかつた。衣服製造会社からの入荷、小売業者への発送。あわただしく一日が過ぎた。

荷物の発送は私と二年先輩の社員の仕事だった。リアカーに荷物を積んで駅まで運んだ。荷物の重量でリアカーが動かなくなる事があつた。そんなときは必ず通り掛かりの人が後ろから押ししてくれた。

私たち二人はよく喧嘩した。喧嘩といつても相手は年上だから必ず私が殴られた。彼は耳が遠かつた。だから私のいうことを時々誤解した。ありもしないことで私を殴りつけた。

役職付きの二人は、見本を持って小売店回りをした。注文を取りにいくのである。バイクで出かけるときもあれば、遠

くは汽車で出かけた。エリアとしては、九州山口一円だったと思う。

夜中に時々係長格の上司が下腹部を押し付けてきた。彼のペニスがかた立っていた。私はそつと握ると手淫をしてやった。たくましいペニスだったことを今でも思い出す。彼は私にもしてやろうとして手を伸ばすことがあった。何度かしてもらった記憶がある。しかしなんとなくいやになり私は拒否した。相手は怪訝な様子だったがそれ以上は迫ってこなかった。

自慰は小学校五、六年のときに覚えた。五年上上の男子が中学校を卒業すると農業講習所に入った。彼がそこで自慰を覚えてきて私たちに教えたのだった。私たちを墓地の中に連れて行き、目の前で自慰を試してみせた。そうして「気持ちがいいぞ。親に絶対に言うなよ」と口止めした。彼の男根の先から白い液が飛び出した。私たちは目を見張って精液が飛び出すのを見た。

私が自慰を経験したのはそれからまもなくしてからである。誰もいない部屋で真似て行為をした。気持ちがよくなくなって、慌ててやめた。何か絶頂感に達することが怖かったのだ。その後しばらくして自慰で射精した。透明な液体が飛び散った。なぜ透明だったのか？ そのとき不思議に思った。そうして不安になった。しかしその不安はまもなく解消した。小学の高学年になると私のペニスからも白い精液が飛び出るようになったからだ。しかし射精した後の疲労感は強かった。

自慰をした後には強い罪悪感が残った。いつも後悔した。しかし翌日になると自分のペニスを握っていた。

中学校の成績はよかった。しかし父は病死して母と兄の三人暮らしだった。農業をしていたが、二反百姓で、食べるだけがやつとだった。農業だけでは食っていけなかった。兄は新聞配達をしてお金を稼いだ。私も兄の手助けをした。

私の中学校卒業が間近になった頃、近所の人が、知人が店員をほしがっているからどうかという話を母に持ってきた。定時制高校には通学させるといふ条件だった。母としては是非もなかった。私も納得した。家を離れることはさびしかったが、家庭の経済的事情が家にとどまることを許さなかった。兄も新聞配達をしながら定時制高校に通っていた。私は洋服卸問屋に就職した。

六.

定時制高校は店から歩いて二十分ほどの距離にあった。毎日風呂敷に教科書を包んで、下駄をはいて通学した。五時に店を出た。会社を出ると気持ちが緩んだ。会社を出て味わう開放感忘れられることはできない。そこには自由があった。

しかし学校では仕事で疲れ果てていたので授業の二時間目まではいつもうつらうつらと居眠りをした。数学の時間には三角定規の目覚ましで頭に落ちた。英語の時間には大きな声が飛んできた。

それでも学校は楽しかった。友人がいた。数人を除いて誰

もが昼間は仕事をしていた。年齢も五十代から十六歳まで幅が広がった。女生徒もいた。一クラス四十名の中に女性は七、八名だった。登下校の道は決まっていた。

帰る時は繁華街を避け少し遠回りをして、三角路地を通った。そこにある小さな居酒屋の前で彼女が立ちんぼをしていた。いつ頃から彼女が立ちんぼを始めたのかはつきりした記憶はない。初めはいなかったと思う。彼女が立ちんぼを始めたのは恐らく私が二年生に進級する二ヶ月ほど前ではなかっただろうか。

二年生になってまもなく下校時に声を掛けられた。

「あなた夜学生？」

「うん」

私はちよつと立ち止まった。

「感心だわねえ」

私はそのまま通りすぎた。それから時々彼女は声をかけた。

「今なの？」

「うん」

彼女がいない時もあつた。なぜいないのかは分かつていた。私は彼女が夜の女であることを知っていた。それでも声をかけられるのがうれしかった。

彼女は私に何時も声をかけるようになった。

「がんばってね」

「風邪をひかないようにね」

「もう春だね」

毎日その言葉が異なることに気がついたのは大分後になってからだ。

学校からの帰りが待ち遠しかった。いや学校に行くことがますます楽しくなったといった方がいいのかもしれない。彼女が店の前にいない時は失望した。私はその路地を通る度に彼女を探した。

いないときは客がついたときだ。別に汚いとは思わなかった。あの美しい顔に見知らぬ男が覆い被さっていると思うとすこし心が騒いだ。しかしそれ以上の感情はなかった。やはりそれが彼女の仕事、運命なのだという思いがあつたのだろう。

私が彼女を抱いたのは二月ごろだつたと思う。その日は雨が降っていたのを覚えている。彼女が他の男に抱かれることで独占欲が生じたのか？ あるいは単なる欲望の対象として彼女を見たのか？ それもあつたと思う。しかしそれにも増して私は彼女が好きになつていた。

彼女は私を客として迎えることを拒んだ。

「いやよ。あなたを客にしたくはないよ。このままでいいよ」

と何度か拒否した。しかしいくらかの紆余曲折のあと、彼女は私を受け入れた。

私が抱きたいことをどういう表現で言ったのか思い出せない。彼女が誘つたのではないことは確かだ。

四畳半ほどの小さい部屋で彼女に抱かれた。多くの男が通り過ぎていった体だったが、心の棘になることはなかった。彼女のやさしさだけで十分だった。窓際の一輪挿しに挿してある梅の小枝が暗闇でぼんやり見えた。白い花が星のように白く浮かんでいた。

七.

はつと我にかえると私は彼女の顔を見た。二十数年前の居酒屋の入口に立っていた顔が目の前にあつた。

「思い出した？」

彼女はいたずらっぽく笑って言った。私は頷いた。

「梅園に花見に行こうと私が誘つたのをあなた無視したでしょ？ 覚えてる？ 無言だったわよ。返事しなかつたわよ」

八.

ある夜、彼女は私を抱きながら言った。

「W梅園の梅が満開だそうよ。一緒に見に行かない？」

私は胸がどきどきした。

女性と一緒に境内を歩く姿を想像した。花を見ながら茶店で食事をする。顔に熱りが出るのを感じた。今まで一度だってそんなことをしたことはなかった。彼女が夜の女であることが梅園に行くことを迷わせたのか？ いや、それより女性と一緒にそんな晴れやかな所に行くこと自体が恥ずかしかつた。そんな可能性はほとんどなかったのに、知った人に見ら

れたらどうしようと思った。さらに彼女にどんな態度で接すればいいのか分からなかつた。私は返事をしなかつた。彼女もそれ以上誘わなかつた。

その夜が彼女を見た最後だった。

翌日の夜、彼女はいなかつた。そうしてその翌日も。私は病気でしまったのかなと思つていた。しかし数日過ぎてても彼女の姿はなかつた。やがて別の女が立つようになった。私は彼女の消息を尋ねた。女は言った。

「ああ、あのひと？ お店を辞めたわよ」

私と彼女の関係は完全に途切れたのだつた。

九.

「あなたと一度W梅園に行きたいんだけど、付き合つてくれる？」

彼女はいたずらっぽく笑いながら私の顔を覗き込んだ。さらに彼女は続けた。

「あの時あなたは梅園に行くのはいやだとは言わなかつたよ。それと私の半生を知りたいと思わない？ こんない方は押し付けがましいわね。でも是非私の半生をあなたに聞いてほしいわ。今まで誰にも話したことがないのよ。一生のうち誰かに話したい。聞かせたい、いや聞いてほしい。この気持ち分かるでしょ？」

私は頷いた。

「そうしてもう一つ、あなたの半生も聞きたいわ。どんな生

き方をしたのか、いつも思っていたことなのよ」

彼女は息を継いだ。

「だから三回私に会ってほしいの」

私は黙って頷いた。

「いいこと？ W梅園に行くこと。私の話を聞いてくれること、そうしてあなたの話を私が聞きたいの」

私は頭の中で会う日取りを考えていた。梅の花の満開は二月の下旬だ。二月の下旬の日曜日を取ろうと思った。あとは何も浮かんでこなかった。彼女は三回会ってほしいといつたが、これから時々会うことになるだろう。私はそう思った。それが二人の暗黙の了解なのだと思った。

「じゃあ私は失礼するわ。明日の講義の準備をしなくちゃならないのよ」

彼女は立ち上がった。

「日時はあなたが設定してね。いいこと？」

彼女は振り向くと言った。その表情はやはりあの夜に見た優しい女の表情だった。私は二十数年前彼女に抱かれた時、彼女から漂ってきた香りを思い出していた。それは今も変わっていないかった。冬の終わりを告げる梅の花の香りだった。

(完)